


<p>団体名</p>	<p>NPO法人 子どもパートナーズHUGっこ</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>生きづらさを抱える子どもの学びとソーシャルスキル支援事業「わくわくクラブ」</p>	
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■活動風景</p>	
<p>●望ましい社会状況（ビジョン）</p>	<p>子どもは、環境や特性に関係なく須く尊重され、主体的に生きる力を身につけることが望まれる。そのために、学校や家庭のみならず地域社会が子どもの育ちに理解と共感を示すことが重要である。同時に個々のニーズについては、専門的知識とスキルをもった専門職の関わりも必須である。 一人ひとりすべての子どもがその権利を保障され、生き生きと社会の中で生きていくことのできる持続可能でインクルーシブな社会、対話が重視される民主主義社会が望ましい社会のありようだと考える。</p>		<p>この日から1か月以上続いた段ボールブーム 左奥では豪邸？づくりが進行中 秘密基地、そり、剣、お店屋さん・・・ 段ボールはこの後さまざまなものに変身していきます</p>	
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>一言で言えば「子どもの育ち・子育てを核とした持続可能でインクルーシブな社会の醸成」である。 そのために、福祉と教育の視点とスキルを持ち、スタッフは常に研鑽を重ねながら、切れ目のない発達支援と子育て支援を実践していくことが重要であると考えている。また地域社会（住民）が従来の子ども観、子育ての常識にとらわれず、対話を重ねながら子どもと共にお互いにエンパワメントし合える関係を築くことの必要性についても情報発信し続けることも当団体のミッションと認識している。</p>			
<p>●団体の活動基盤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●人材の確保と育成：共感的に子どもと保護者に寄り添うことができ、研鑽を重ねることのできる地域スタッフ、学生。専門性を有し、広い視野と知見をもつ専門職（教員、OT、保育士、心理士等） ●社会資源：法人の拠点と居場所機能をもつ施設。行政機関、地域コミュニティとの連携。 ●活動資金：ミッションを形にできる持続可能な自主事業を通して得られる自己資金。個人、団体、企業の協賛、寄付。 ●ナレッジ：持続可能な活動のための運営のマニュアル化 ●情報：地域社会、ニーズのある方々に向けてのオンライン情報 			
<p>■活動報告 <400字程度></p>		<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>		
<p>1) 個別の面談:今期より、2校区で事業開始。初回面談で保護者、子どもの思いを聞き取り。個別の対応が必要な部分は保護者と個別に面談。子どもの良さを伝え肯定的に我が子をとらえられるよう支援。必要に応じて学校とも連携。就労している保護者多い中、Googleformアンケートを実施。（23世帯25名を対象に100%実施） 2) 学習支援:子どもの困り感に応じた合理的配慮を実施。家庭でもできる配慮を第1に考え、学校へも伝え授業中に生かしてほしい旨を伝えた。（5名）独自の学びのプリントを作成。達成度を見える化したことで意欲が向上。（25名全員実施） 3) ソーシャルスキル支援：野外活動を2回実施。学年を超え子ども同士ペースの合う子どもたちが交流できた。市内農業者と連携。芋苗植えと長距離徒歩で自己肯定感の向上につながった。（子ども21名保護者10名参加）水、土、泥、草木、火を使って遊びを展開。後半は週を越えて遊びが継続、発展した（25名全員）楽しいと思える体験、自分を肯定する友の存在は自己肯定感レジエンスの獲得に寄与した。 4) 研修会:未だコロナ禍の影響があり最も苦労した。スタッフ研修は毎回のミーティングで課題共有、研修としてとらえ協議の場とした。前半ハイブリッドで参加、後半はオンライン講演会に参加。保護者へのGoogleform形式のアンケートは90%以上の回答率</p>		<p>1) 2校区での実施と、活動が広がった1年間であった。課題を抱える児童の把握をこの事業を通してできていること、食品支援が有効なサポートになっていることを当事者だけでなく行政の各機関が認識したことは大きな成果と言える。今後の事業展開の継続と広がり道の筋がついたのではないかと考えている。 2) 独自の学習プリントの作成、その到達度をはかる指標となる表も作成することができたのは昨年度からの事業の継続の成果といえる。 3) 今期は校区を飛び出での屋外活動を計画したがそれも予定通り実行でき、それまで交流のなかった児童同士がつながるなど想定外の成果も得られた。はじめての体験活動に拒否的だった家庭、児童については個別にサポートし参加することができ大きな自信につながったようだ。 4) 学校や塾、放課後等デイとは違い子どもの本来の良さに着目、肯定する活動であることを保護者やスタッフと共有し続けた結果、継続しての参加希望、他校区からの事業要請もきている。</p>		
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p>		<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>		
<p>1) 異業種団体との連携、協働作業及び学校他支援機関との連携 ・体験活動では、市内飲食店へパンの提供依頼、市内農業者協議会とは芋苗植え体験を実施。事前説明でニーズのある子どもたちの存在に驚かれており、必ずしも研修会ではなく、活動の中で連携することで理解を深めていただくことが可能と気付かされた。 ・ヤングケアラー疑いの児童、学校での配慮により読み書き困難の軽減が可能となる例不登校から登校になる例があり、直接学校と協議でき個別の家庭ともつなぐことができた。同時に特に困難事例は、本事業だけで完結すべきではないことを痛感した。 2) 研修会の在り方 従来通りの講師を招聘しての研修会だけでなくオンラインでの研修会に参加することも有効であることを実感。重要なのはその後の課題や論点の共有であることに気付かされた。学生スタッフにとっては毎回のミーティングの深化は、即活動の成果となって現れる即効性のある研修となることも明確になった。就労している保護者、外国籍の保護者へは、snsを利用したアンケートまた平易な文書での発信も有効であった。</p>		<p>1) 家庭、保護者の価値観：子どもの権利を事業や活動の中で周知していくことの難しさを感じている。研修会を通して学んでもらうことはできても、マルチリトメント傾向のある家庭では、保護者の生育過程もその中にあり、頭で理解することと実際の生活の中で実践するには、周囲のサポートが必要。そのためには本活動のような場がより定期的に実施されることが必要。そのためには地域社会の理解もまだ不十分。snsを通した情報発信による事業の周知をはかりたい。 2) 事業の継続、発展：本事業の有効性、必要性は、学校、行政機関も認識するところだったが、今期予定より児童数が増えたため、想定以上に人件費がかかるなど、事業の質を落とさずに継続するためには、公的な予算を活用しながら、公民館など場を借りるのではなく、拠点を置き活動する必要がある。そのために団体内部での運営部の組織強化と行政との協議を重ねていくよう努める。</p>		
		<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>		
		<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>異業種の方々と交流、学校、行政との連携で、保護者や子どもの自己肯定感向上</p>	<p>を達成しました。</p>
		<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>		
		<p>学校や地域の保護者に対し、拒否的だった保護者が好意的な対応に変化しました。不登校傾向の子どもが登校できるようになったり、他者とコミュニケーションをとることがおっくうだった子どもが子ども同士で遊び、交流するようになりました。子どもは成長する、素敵に変化する、と感じる場面がいくつもありました。</p>		